やまさき文化

’２０－３＊№３９

宍粟市山崎文化協会

事業承継と地域文化継承

宍粟市山崎文化協会長　前野良造

高齢化が進み、特に中山間地域では人口減少が激しくなる中で地域のお店や事業者の数が激減しており、生活者にとって益々住みにくくなっている。事業者減少の要因は何より後継者不在が大きいようだ。事業者の地域における社会的存在価値を維持し住民の生活環境を守るため、商工会など経済団体でも事業承継の支援を始めている。

地域の文化活動団体も人数減少と高齢化により、これまで通りの活動が難しくなり、活動休止あるいは解散となる例が目立ち始めた。山崎文化協会の中でもこの数年で退会・解散の団体が発生、総会員数も年々減少の一途を辿っている。このままでは歴史ある郷土文化の継承も難しくなりそうだ。

地域の古い歴史や民話などを調査していると、時々埋もれた古い資料に出会い驚くことがある。過去にも同様の視点で郷土の歴史を調査・研究された方がおられ、立派な成果を残されていることに敬服し、そこから多くの事を学ばせていただき、残すことの大切さを実感することがある。

事業の場合、一旦途切れるとそのリソース（場所や商売道具、人材など）を維持できず時をおいての再興は難しくなるが、文化活動の場合はその成果や経過、根拠などを何らかの形で資料に残せる場合が多い。もちろん弟子入りしなければ伝授しにくい技能やノウハウもあるだろうが、例えば映像などで残せば大きな手助けになる。それらを残すことで、一旦途切れてもまたいつか興味を持つ人が現れ、活動の成果や精神が引き継がれさらに発展することも期待できる。

最近のデジタル技術を使えば、文書だけでなく画像や映像・音声などによっても半永久的に残せるし、経年劣化や災害による物理的破損からも救える。クラウド（インターネット上）に保存すれば、利用する人にとって時間や場所の制限も垣根が低くなる。地域の住民だけでなく興味を持つ日本中のすべての人が関われる、いわゆる「関係人口」増加へのきっかけにもなる。

郷土の文化を維持・振興するためには、このような支援をすることも文化協会の新たな使命ではないだろうか。

◇目　次◇

事業承継と地域文化継承　前野　良造　1
霊峰アムネマチンの思い出　（故）安井　道夫　2
特別寄稿
文化人になりたい　有田　尚徳　7
短　歌　城内　悦子　9
俳　句　若松　幸子　11
揖保川高瀬舟着場周辺整備の思い出　伊藤　一郎　13
改めて「新潮会」のご紹介　岸本　義明　13
茶華道と私　山口　澄代　14
即位の祝賀能　三谷　恭三　14
宍粟市少年少女合唱団　上所菜々実・上所千晴　15
『芳野懐古』　藤井竹外　小田　博己　15
民踊グループと共に　安川英美子　16
山崎美術協会と六十年　福岡　久藏　16
かるたに寄せて　渡邉　禮子　17
七十年前の海賊の唄　三宅　哲朗　17
和太鼓に出会えたこと　中務　花音　18
昭和会より　安井　克典　18
平成から令和へ　菅原　淳　19
山崎邦楽の会初夏の演奏会顛末記　野村　恵子　19
踊り・宝・継ぐ（つなぐ）　金川千香子　20
教え子からのうれしい便り　石田　陽子　20
平成から令和へ　小林　茂樹　21
歌の力　高寄恵美子　21
山崎・加生・つた・いさわ冠句会　中瀬　公三　22
川柳破丸会　長川　伸介　23
追悼　安井道夫さん　鎌田　裕明　24
第四十一回　春の芸能祭のご案内　24
編集後記　鎌田　裕明　25
表紙画／絵　藤原　義弘
表紙題字　荒木　俊介

霊峰アムネマチンの思い出

（故）安井道夫

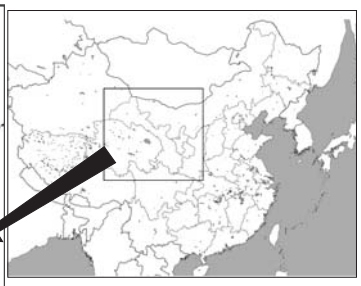
アムネマチン（アニ・マチェン）峰は中国青海省の南東部果洛蔵族（ゴロク・チベット族）自治州にある雪山で、四季を問わず真っ白な雪の衣をまとい、遠目にもその姿は崇高でいかにも信仰の山にふさわしい。古来、民衆宗教であるポン教徒、また仏教徒などの厚い信仰を集めているのも首肯できることである。

ゴロク・チベット族自治州は、北方から東方にかけ青海省の海南チベット族自治州、黄南チベット族自治州、甘粛省の甘南チベット族自治州、東南方は四川省のアバ・チベット族チャン族自治州、南方は同カンゼ・チベット族自治州、西方は青海省の玉樹チベット族自治州などに取り囲まれ、チベット族の居住区が現在のチベット自治区を越えていかに広範囲におよんでいるかが判り、それだけに他民族との激しい紛争も繰りかえされてきたのである。

この地区は中国により封印され、長い間外国人旅行者にとっては垂涎の地であったが、一九八四年四月の解禁の直後、松原正毅国立民族学博物館教授（当時）を団長とする旅行に同館「友の会」を通じて参加することができ、幸い私は初めて青海省奥地へ入ることができたのである。そのときの体験をふまえ、ゴロクと「幻の山」アムネマチンの信仰的側面を述べてみたい。

ゴロクの来歴は、二、三世紀頃、西チベットから東に遷って上・中・下の三つの国を建国したと伝えられているが、うち上ゴロクがアムネマチンと黄河源流域を居住区とするのである。このように発展を続けるゴロク三部は、十九世紀末には二百以上に分化した部族集団を包み込み、互いに独立独歩の状態を維持しながら、状況に応じて離合集散を繰り返していたのである。

彼らの居住区は、平均標高が四〇〇〇メートルを越す厳しい環境の中での牧畜業で、一方そのような厳しさからか、ゴロクが文献で知られる最初から、草



中国全土

原交易の隊商を襲撃する恐ろしい掠奪集団＝強盗団として悪名を轟かしていたのである。

あるゴロクが、ロシアの高名な探検家ゴズロフに語ったという言葉が伝えられている。

「俺たちゴロクを、他の奴らと比べようとするな。おまえたちは何かほかの掟に服従している。ダライ・ラマのそれや中国の、あるいはどこかのちっぽけな族長のそれにだ。……それに比べ、俺たちゴロクの人間は束縛のないことだけを知って生まれ、母の乳によって自らの掟にまつわる知識を飲み込む。それらに代わるものは決してない。……俺たちは誰の奴隷でもない。わがボグドハーン（モンゴル最高位活仏）のものでも、ダライ・ラマのものでもない。部族はチベットでもっとも恐れられ、もっとも力強い、中国やチベット人等、まったく見下しているのだ。」

と、チベット中央政府のダライ・ラマ政権にすら反抗を示す態度を露わにしているのである。

しかし実際には、中国清朝期から国民党期にかけて官軍による残虐な掃討作戦にさらされ、その都度やむを得ず臣下の礼をとらされている。そればかりでなく、民国期に入ると甘粛省を出自とする回族（中国のイスラム教徒）の青海軍閥・馬一族がしばしばゴロク境界を侵すようになり、とくにアムネマチン山麓の金鉱をめぐって激しい戦闘を繰り返すことになる。そのうち一九二一年の戦闘はもっとも激しく、全面敗北を喫した中ゴロクは、ダライ・ラマ政庁に使者を派遣して恭順を示す一幕もあったのである。

アムネマチン主峰

ゴロク族にとって回族軍閥や、中国共産党軍の侵攻に対してその盾としたのがアムネマチン峰である。世界一長いと言われるチベット英雄叙事詩「リン・ケサル大王伝」においてもケサルの民とアムネマチン峰は一心同体で結ばれていて、「山」としてある以上に、部族を守護する神聖な場所であること、またその神聖性はある個体の霊魂（ケサル）が外界の特定の自然物に宿されているというのである。そのため当然のことながら、山に住む神への供犠は欠かせず、守護を介した関係維持は部族の領土保全にまで関わり、祭祀権は部族の使命と捉えられていたのである。

ゴロク族女性の正装

さて、今回はゴロクと霊峰アムネマチンの信仰に限ったテーマに絞ることであったが、どうしても書いておかねばならない事実がふたつある。

一つは、中国共産党解放軍によるチベット侵攻である。一九四九年、解放軍はアムド地方を支配していた馬歩芳（青海省長）、カム地方東部の劉文輝（西康省長）を下し、チベット領土の内ガンデンポタンの統治下にない領域をまず手中に収めていった。ガンデンポタンとは、ダライ・ラマを長として一九四二年、ラサに成立したチベット政府のことで、一九五九年にチベット動乱でダライ・ラマはインドに脱出したため、その後はこの亡命政府を指す言葉になっている。侵攻の翌一九五〇年には、そのガンデンポタンの勢力圏にも人民解放軍は侵攻を開始した。チャムドの闘いでは東チベット軍に勝利したとは言え、解放軍側にも犠牲者数千人を出す激しい闘いとなった。

当時、辺境のゴロクの地には十万人のチベット人・ゴロク族が住んでいた。そこへ共産党は中国から数千人の農民を移植してきて、ゴロクの牧草地を農地に変え、放牧生活を破壊したため、ゴロクは僧俗問わず武器を取って中国農民に襲いかかった。それに対抗して共産軍は兵三千を投入して殲滅戦を展開、ゴ

ロクの居住区を襲って老若男女を問わず数千人を殺戮したという。中国はこの一九五四年の闘いを「カム反乱」と呼び、「チベット問題」の始原としているのである。その後現在まで続くチベット人被疑者に対する取り扱いは、苛酷を極め、刑務所・強制収容所への収監、再起不能なまでの苛酷な拷問、なぶり殺し、虐殺・惨殺など、後に挙げる統計資料によっても知ることができるが、その真の狙いはチベット文化のこの世からの追放で、それ自体の抹殺が真の目的と思われる。

つい最近の五月十日読売新聞に、「チベットSNS「密告」義務　ダライ・ラマ支持を監視」の見出しのもと、次のような記事が掲載されていた。

「中国チベット自治区の地方政府が、暴力団対策などを名目に、国民的スマホアプリ「微信（ウィーチャット）」を使った事実上の密告を住民に義務づけるなど、住民への管理を強めている。」

少し古いが統計には犠牲者は次のように出ている。

チベット人の受難はアムネスティの『中国における拷問』（一九九二年）、国連人権委員会の『チベットにおける真実』などが告発しているが、中国チベット人の総人口の五分の一が虐殺または行方不明となっており、一九五〇年から一九七六年のわずか二六年間の犠牲者ですら次のような状態であった。

「一七三，二二一人のチベット人が、刑務所もしくは強制収容所で死亡。一五六，七五八人が処刑死。三四二，九七〇人が餓死。四三二，九七〇人が戦闘もしくは暴動中に死亡。九二，七三一人が拷問死。九，〇〇二人が自殺。（ここには一九八〇年代以降の犠牲者数は含まれていない）」

一九五六年時点ではゴロク地区で一三〇，〇〇〇人あった人口が一九六三年までに半減の六〇，〇〇〇人になったといわれる。

さて、もう一つの話題は、アムネマチン峰の標高で、一九二〇年代から戦後にかけて、エベレストより高い山、またはそれに比肩する高山があると話題を振りまき、関係者を騒然とさせた。特にアメリカの退役軍人レナード・クラーク著『謎の山アムネ・マチン』（原著・一九五四年、日本語版・一九五九年ベースボール・マガジン社）は出色で、奇書ともいうべき面白さを持っている。この書には著者自身が測量した三角測量の数式までつけられ、結果は九，〇四一メートルである。

もちろん、そんなとてつもない山が存在するはずもなく、一九八〇年になって、ようやく北京地質学院登山隊によって六，二八二メートルと確定されたのである。この主峰は一九八一年五月二二日、上越山岳協会アムネマチン友好登山隊の三人の日本人によって初登頂され、その記録は『アムネマチン初登頂』（一九八二年一月　ベースボール・マガジン社）として出版されている。ただし、中国との友好登山の記録は、何より中国人との友好関係をいかに表現するかに費やされ、人々の暮らしも、伝統的な歴史も、環境さえもコミットされ、実に味気ないものが多い。それに比べクラークの記録は、「馬歩芳と班禅喇嘛」から始まって「ゴロク族に狙われて」、「聖山の番人たちに追われて」、「ゴロク族との和平協定」、「黄河の水源」などクラークの足跡の背景が非常に詳しく描かれ、記録としても貴重な書物である。

＊

さて、別所祐介の論文『チベットの英雄叙事詩「リン・ケサル大王伝」と地域伝統の再編をめぐる一考察　中国青海省ゴロク・チベット族自治州の事例を中心に』には、次のような記述がある。

「巡礼者はこの主峰部をすっぽりと囲む全長一八〇㎞の巡礼路を、徒歩で七日間前後かけて時計回りに一周する。彼らはその間さまざまな宗教的霊力をプールした場所＝「聖跡」に遭遇し、これに接触儀礼や供犠を行う。特にマジャポム

アムネマチンの基点　青海省省都西寧市郊外・リタール寺で問答する僧たち

ラ（ケサルの守護神）の干支年には、通常に倍する功徳が積めるとされているため、ゴロクとその周辺の広い範囲から数万人の規模の巡礼者が殺到する。」

そうして巡礼やその背景が詳細を極めて記述されているが、いまはスペースの関係で、一九八四年にアムネマチン峰山麓地帯で私が実際に体験した二、三のことに限定して語っておきたい。

ゴロクの中心都市マチェンは西部劇の舞台か、芝居の書き割りのような道路ばかりが広く、民俗臭を一切感じさせない出来たての建物を連ねた新興都市で、私たちはそこに一泊後、トラックの荷台に乗って雪山郷へ向かったのである。ゴロクの居住区もまた政府の放牧民定住政策により、バラックに毛の生えたような規格建物の中に囲い込まれているふうであった。住民移転の「生態移民村」がもっとも大規模に行われたのが、黄河・長江・瀾滄江の「三江源」地区で、一九九〇年後半から打ち続く河川災害や黄砂の襲来による環境荒廃の主原因を「放畜民の過放牧」とみた政府は、家畜の放牧行為を一切禁止したのである。彼ら放牧民は都市近郊に設けられた「移民新村」に集住し、当然生業転換を迫られることになる。幸い雪山郷のゴロクには、鹿茸という生業があったのである。

雪山郷到達の翌日、私たちは断崖といってもいい急斜面の道を上りつめると、そこには平坦な牧草地が広がり、鹿こそ奥地に追いやられて数は少なかったが、鹿茸を天井から吊った乾燥小屋が軒を連ねていた。その同形・単体の連続は現代美術の美を思わせ、私はいたく感動していた。

鹿茸とは鹿類特有のもので、春に再生した袋角をさす。牛、羊、カモシカなどの角は生え替わることなく生涯そのまま角化するが、牡鹿の角は春根元から脱落、その後から小さな瘤のようなものが二〜三ヶ月に七〇㎝に達する早さで生え出て来るのである。その有機物を多く含んだ適当の時期に、切り取るのが鹿茸で、形状がキノコ様に見られるためこのように呼ばれているようである。

その薬効については秦の時代から認められていたといい、『中国人民共和国薬典』には次のような記載があるという。

「腎腸を壮んにして、精を増し、インポテンツや遺精、子宮の冷えによる不妊、痩せすぎや虚弱体質、気力が出ない、冷え性、めまい、耳鳴り、背中の疼痛、筋や腱の衰え、月経以外の出血やおりもの、治りにくい膿瘍」（医薬）

という風に、万能薬に近い効能を持つものとされてきたのである。

雪山郷の場合、標高の高さ、広大な放牧地など環境が鹿茸生産に適した立地にあったことはなによりの幸せであった。

さて、マチェンに向かっての帰路、アムネマチンから流れ出る白濁した渓谷と、マチェン側からの清冽な流れが合流している地点のすぐ上で車を停めた。道沿いでありながら四角く石積みされた場所に色さまざまな色彩のタルチョー（祈祷旗）が溢れ、尋常な場所ではないことは一目で分かった。樹木といえば、雲杉の細い丸太が突っ立っているだけだが、それにも二重三重にロープがかけられ、幡に近い布地が横向きに結わえつけられている。それらの布地には経文や真言が印刷されていたはずであるが、今は判別できない状態であった。

石垣の石一つずつには、観音の真言（オン・マニ・ベーメ・フーン）が刻み込まれ、龕（がん）が穿たれたものにはその内部のどんな小さな石に至るまで、聖なる刻印がなされているのである。大きな石になると、赤く彩色された阿弥陀仏の種子、触地院の釈迦佛の線描画、美しいチベット文字など、死者の成仏を祈るかのように安置されている。なかに石に巻き付いた古びたタンカ（掛け軸様の仏画）があって、尊像の顔の青さだけが透き通った空を思わせるほど鮮明で、わずかに残った帽子と白獅

雪山郷の鳥葬場　石積みにはためくタルチョー

子の姿からダムチャンの像かと推測されるのである。

なるほどこの台地はすぐ目の前で断崖となって落ち込み、谷を隔てた向こう側の斜面の黒い岩肌にもタルチョーに囲まれた相当の区画があって、ここは鳥葬の場所であるという。

チベットには火葬、鳥葬、水葬、土葬などがあるが、もっとも一般的で現在でも多く用いられている葬法が鳥葬である。他にダライ・ラマ特有のミイラ葬、また高僧の遺灰を石英に混ぜて小さな仏像に成形したツァツァをチョルテン（仏塔）のなかに塗り込め、また通り抜けることのできる大きなチョルテンでは、通路の両側に無数のツァツァが積まれていることがある。私は以前、インドのチベット文化圏であるラダック地方でこれを見た。紺碧の空の下、砂漠地のなかに真っ白なチョルテン群が黒いかげを落とし並んでいる様は、チベット密教風土のもっとも美しい光景である。

一方、雪山郷ではタルチョーのはためく風の音のほかに、何の物音もない。あくまでも深い空の青さのもとで、高原は鎮まりかえり、風はそんな静寂の裏側も吹き抜けていくようであった。禿鷹に食された肉体は風のなかに解消し、魂は肉体を離れて天にのぼる。私はタルチョーのはためく下で、ただぼんやりと立ち尽くしていた。なぜか、禿鷹はゴロク族の移住に連れて、その後を追っていくと言い伝えられているのである。

最後に人知を越えた自然の造形力の不思議さについて書いておきたい。マチェンを出てその日の夕方に遭遇した広大な放牧地での出来事である。彼方にはやや赤みを帯びたアムネマチン連峰が美しく横たわり、草原では白馬に乗った男がただ一人、百頭あまりの羊の群をまっすぐに一頭ずつ並べていく。白い直線ができると、男は群の最後に立ち、羊を追って移動を開始する。白い線はいくぶん乱れ、二重三重になりながら、それでも案外足早に私の目の前を右回りに通り過ぎていった。そうしてアムネマチンを正面に見る地点まで来ると、不思議なことに群は再び固まって、しばらくまるい円を形作り、一呼吸あって徐々に近くのテントに向かって動き出すのである。

あの牧童だけの意思でもあるまいと思う。私には自然の生理を見るような感動があった。

そのとき一羽のツルがアムネマチンに向かって飛んでゆくのを見たが、果たして錯覚であっただろうか。

補　記

二〇一九年六月五日、父・安井道夫が亡くなりました。

二〇一八年の暮れ方、父は『やまさき文化』の原稿依頼を受け、翌五月の連休までに第一稿を完成させました。いつもと変わらず書くことを日常として、この世を走り抜けていきました。

これまで父は持ち前の旺盛な好奇心で、社会への問題提起や芸術文化評論を『カフカ』誌上で発表してきました。徹底した資料調査や現地に足を運ぶなど、父の興味は尽きることがありませんでした。

父はまた、国立民族学博物館・友の会（当時）の設立当初からのメンバーで、本文に登場する松原正毅先生や故加藤九祚先生、館長だった故梅棹忠夫先生の調査旅行に参加しました。チベット、インド、モンゴル、トルコへと向かい、そこに暮らす人びとの生活文化に直接触れて大いに刺激を受けたようです。伝統文化を継承する少数民族に対する強国の理不尽な圧力に怒ることもしばしばでした。

本文はそうした父の経験と研究の成果です。

宗教や民族の違いからおこる問題は、日本に住む私たちにはわかりにくいところがあります。しかし、そうした問題に無関心にならず、問題意識をもつことは重要だと思います。父は事実を知ろうと、目を背けることなく真正面から取り組む人でした。

安井　みさき

特別寄稿

文化人になりたい

弁護士
有田尚徳
（宍粟市山崎町出身）

一　私の経歴

私は宍粟郡内で生まれ、四歳から宍粟郡城下村で過ごしました。

東は揖保川の清流を、そして川戸山をながめ、西は小高い金谷地区を、そして国見山をながめてきました。子供の頃は、揖保川の川原で魚釣りをし、あるいは水泳をして過ごしてきました。その風景が、私の「心のふるさと」なのです。

私は、城下小学校、城原中学校、山崎高等学校を卒業するまで城下で過ごし、高等学校の卒業と同時に山崎町を離れました。

大学卒業後は金融機関に勤めましたが、思い直して司法試験を受験し、弁護士の登録をしました。

そして再び宍粟と関係が生じ、旧宍粟郡の五町、合併後の宍粟市とは法的アドバイザーを務めております。

二　弁護士の仕事の内容

裁判官も弁護士もそして検察官も、「発生した前提事実を確定し、それに法律を適用すること」であり、刑事事件ではそれをもって国家が国民への処罰を実行し、民事事件ではそれをもって紛争を解決することにあります。

そして前提事実の確定とは、「真実を明らかにすること」ですが、神様ではないので、証拠にもとづいて「真実に近づく」しかないのです。そして法律の適用は、事実の発生した時点に存在した法律を適用するのです。次に紛争の解決とは、民事事件において、争いを解決すること、即ち当事者にできる限り納得の得られる解決結果が導き出されなければならないのです。それには真実の解明が必要なのです。

三　真実に近づくこと

弁護士も検察官も人間です。まして判定を下す裁判官も人間です。神様であれば天上から地下を見下ろし、真実を決めてくれます。しかし神様ではない以上、事実の認定は、証拠によるしかないのです、しかも、その証拠というものが、必ずしも事実を反映しているとは限らないのです。事実を確定するために価値のある証拠か否かも、当然に判定されなければならないのです。

㈠　刑事事件では、国家が犯罪者を処罰するのですから、国を代表する検察官は、被告人が犯罪者であることを疑いなきまでに証明、即ち事実を確定する必要があるのです。「疑わしきは被告人の利益に」と言われ、犯罪者か否か「疑いがさしはさまれる余地」があるときは、処罰してはならないのです。

かつて、DNA鑑定によって真犯人であるとされた人が、当時のDNA鑑定の方法では、必ずしも確実性が担保されていないとして、犯罪性が疑われたのです。即ち、DNA鑑定を補強するための他の証拠によって犯罪者であると特定できなければ有罪は崩れるのです。犯罪者として断定する証拠が崩れてしまうこと、即ち、犯罪者とするに足りる十分なる証拠がなければ「罪とならず」となるのです。人間が人間を裁くことの難しさです。

刑事事件については、市民参加の「裁判員裁判」がされております。重大犯罪について市民感覚の導入と集中審議による迅速な手続きがなされるようになっております。しかしながら、刑事司法の原則である「疑わしきは被告人の利益に」当然のことなのです。

特に刑事事件においては、犯罪行為時に存在した法律によらなければ処罰してはならないのであって、「罪刑法定主義」と言われていることです。行為時には犯罪でなかった行為が、その後に作られた法律によって遡って犯罪として処罰されてはならないのです。

最近では、社会の事象に法律が遅れていることも多いのです。近時発生した「あおり運転」で、高速道路に停車させたところに別のトラックが突っ込み死亡した事件がありました。「危険運転」処罰しようとしています。法律上、あおり運転を処罰する規定がないため、新しく処罰規定を制定するのです。

㈡　民事事件では、原告と被告が争います。そして民事事件では、自分の言

い分を、より強く証明をなした方が勝訴することになります。ここにおいても「真実は最も強い」はずですが、証拠が乏しい場合は、自分の主張する事実を証明できず、それは真実とは認められないのです。従いまして、裁判の認定事実と真実とが一致するとは限らないのです。しかし弁護士の立場は、自分の依頼者が述べる事実が真実を述べているものとして主張し、その真実に迫るために、即ち真実を明らかにするために依頼者に証拠の提出を要求することになるのです。

例えば、甲が乙に一〇〇〇万円を貸した金があるから返してほしいと請求します。乙は甲から一〇〇〇万円を借り入れたことはないから返す必要はないと否定します。甲は乙に一〇〇〇万円を貸したことを証明しなければならないのです。そのために甲は乙名義で作成されている一〇〇〇万円の借用証書を提出します。乙はその借用証書は自分が借主として署名したものではないと言い否定した場合、さらに、甲は乙に一〇〇〇万円を貸し付けた借用証書が乙の意思によって作成されたこと、そして金員を乙に交付したことを証明しなければならないのです。このように貸した金の返済を求める前提事実を証拠によって確定することが必要なのです。

そして、乙が一〇〇〇万円の金を借り入れたことが認められると、乙はそれでも一〇〇〇万円を返さないとするためには、すでに一〇〇〇万円を返したとか差引きして相殺済みとかの事実を領収書などによって証明することになります。

四　結論の存在

問題の解決には必ず結論が必要なのです。

㈠　刑事事件では、裁判所は被告人を有罪とするか無罪とするかを決し、有罪とすると被告人を△△の刑に処するとの結論を出すのです。しかし、裁判所は証拠を見誤ることもあり、誤って罪を犯した者を無罪にしたり、同様に、罪を犯していない者を有罪にすることが生じるのです。それは証拠から判断せざるを得ないからです。神様ではないのです。以前から、犯行後に作成された証拠を信用しすぎると判断を誤ることが多いのです。「自白は証拠の王である」として、過去には犯行後に作成されたもの、即ち自白調書であったり、あるいは共犯者の供述調書などが重視されました。しかし、犯行時に犯行を裏づける物的な証拠が必要なのです。

なぜならば、自白調書も共犯者の供述調書も強制された結果、作成されたものであったり、あるいは誘導されたものであったりする危険を伴うのです。

㈡　民事事件では、原告と被告がそれぞれ自分の言い分を主張し、そしてそれを裏づける証拠を出し合うのです。加えて、相手の言い分は自分の言い分と違うわけですから、相手の提出する証拠は、自分の証拠と矛盾するか、不利なものなのです。そしてお互いに、相手の証拠を弾劾する証拠を提出することになるのです。

こうして集成された証拠から裁判所が判定するのです。判定するべき裁判官も神様ではないのです。証拠評価の判断も、物を見る角度から違ってくるはずです。

㈢　刑事事件は勿論のこと、民事事件においてもその結果は当事者にとっては重大な影響を受けるのです。その人の人生を狂わせてしまうこともあります。

それらを含めて裁判所の判断が誤っているのではないかと是正を求めるため、上級裁判所に上訴することになります。上級裁判所の判断も人間のすることです。

五　私の人生

私もすでに、法曹界で五〇年に至らんとする人生を過ごしてきました。人間関係の鋭利な利害対立の中に、なお現在も身を置いております。文化的生活は勿論、芸術性からも、当然に、遠く離れた位置におります。

私は、時間的余裕があると、戦国時代の毛利が、北（出雲）の尼子から、西（周防・長門）の大内から、圧力を受けながらどのような戦略と戦術をもって、大内、尼子にとってかわったのか、その歴史事実に興味をもって、読み解くことを楽しみにしております。なおいまだ趣味においても、闘争感覚から抜け切れないのです。

略　歴

昭和29年３月　城下小学校卒業
昭和32年３月　城原中学校卒業
昭和35年３月　山崎高等学校卒業
神戸大学法学部卒業後、神戸銀行大阪船場支店勤務
昭和47年　司法試験合格
　　司法修習を経て弁護士登録

短歌

山崎歌人協会
やまさき文化大学短歌部詠草

頭のなかに記憶を喰らう虫生れて
次第に活動はじめる気配
恐れるもの密かにわれに棲みつきて
命終のことあれこれ巡りぬ
南　裕之

羽根広げ魚を狙う鵜のまえを鴨の親
子は悠々と過ぐ
初詣の家族写真の輪をぬけてばあば
は孫追うカメラマンになる
福元千代子

もらい来て厨のすみに三年余梅酒は
琥珀の色を増したり
おめでとうの声蒼天に飛び交いて祝
賀御列厳かにゆけり
谷本　幸子

宝くじ買えば「あたりますよう」窓
口の艶めく声に夢はつのりぬ
楊貴妃の柳眉のごとき三日月を見上
げる背中に霜月の寒
中谷　賢二

渋滞の車列の見ゆる窓際でモーニン
グする老いをうべなふ
世の隅に活躍もせずながらへて妻と
ふたりで百姓にはげむ
門積　健三

手作りの帽子をかぶる老いわれを師
走の風が飛ばさんと吹く
音もなく降りくる氷雨のただ中にい
く度も首を伸ばすバス停
森元　満子

◇第十五回宍粟市民短歌祭
入賞・入選作品

。兵庫県知事賞
内からは開かぬ施設の自動ドア負
ひ目を胸に母に手を振る
新井　慶子

。兵庫県議会議長賞
帰りゆく嫁がしゃがみて二、三本
玄関先の草を抜きたり
森本萬千子

。神戸新聞社賞
試験場の固き木椅子に膝揃え恐れ
つゝ受く認知の試験
山村　幸子

。宍粟市長賞
老々介護の車椅子押し行く男性(ひと)は
その妻の髪手ぐしでととのふ
大谷　忠子

。宍粟市議会議長賞
独り居の母と過ごして帰る娘(こ)の足
あと埋め雪降りしきる
谷本　幸子

。宍粟市教育長賞
川岸の少年やをら立ちあがり決意
せしごと石ひとつ投ぐ
岡本　光代

。宍粟市文化協会長賞
ごめんねと若きナースのエプロン
のたて結びなる紐に手をやる
高尾　米子

。宍粟市歌人連盟賞
リハビリの夫に寄り添い行く道に
走りすぎゆく園児の列は
志水　晴美

放置田に刈られし草の乾きゐて風
にのりくる牧歌のにほひ
藤本　太子

まだのこる力しぼりて筍を掘れば
手ごたへずっしりとあり
佐伯恵美子

梅雨時の水門管理難しく雨降る度
に川を見に行く
久内　啓規

友逝きて寂しむ夫に「手品よ」と
湯にくぐらせしトマトの皮剥ぐ
釜付　靖子

登校の前のジョギング少年の夢は
乗馬で騎手になること
小田　朝子

プチプチと白、黄の薬掌にとりて
数たしかめて一息に飲む
芦谷　孝子

新樹短歌会詠草

おばあちゃんどうぞと席を譲りくる
祖母もつ若きかころを頂く
寒ければ一枚はおりと母の声聞こゆ
るような今朝の冷え込み
釜付　靖子

この土手を愛犬チェリと駆けし日よ
チェリは逝きて我も老いたり
打ちなびく白髪のごとき穂芒を川面
をそめて今日もくれゆく
新井　慶子

古き物に心を寄する営みに備前の壺
の古色を愛す
推敲に嵩ばるメモを細断す指の二本
がシュレッダーなり
安東はつ子

海見ゆる馬坂峠の野路菊を今年はつ
いに見ずじまいなり
通草(あけび)の実口いっぱいに頬張りてペッ
ペと黒き種飛ばしたり
衣川有賀子

幾度も一羽のトビが哀しげに鳴いているのは子を呼ぶ声か

見るだけとスマホで探す通販の六十四％ＯＦＦに買うか買わぬか

前川　有里

杖に手を置きて枯葉を詠みましし面影の師ともみぢ山ゆく

もみぢ山登り下りの一会にて翁にいただく棒切れの杖

栗山　節子

つくつくぼうしの会詠草

枯葉舞う時雨がそっと通りすぎ冬が来たよと頬にふれたり

秋の彩かえで落葉が滝川を渦まきながら流れていくも

上垣　勝子

ふたとせをチルドの部屋に眠りいし柚子ジャム美咲し香り立ちくる

還暦の祝の赤き法被着て頬笑む息子の顔夫に見せたし

三木　富子

紅葉に最上山がかがやく日登りて城下平野見渡す

畦道をはっしはっしと跳び交いし蝗を今朝は草に葬むる

杉本　幹子

一葉会詠草

行く末の仕置を子等に頼みおきさらさら生きる媼親しも

「すげ替へる」死語となりしか幼き日下駄屋の框に鼻緒選びき

植木　洋子

木蓮の葉ずれの音もさやけくて台風一過の庭に秋来る

厨房に秋日の長くさし入りてコーヒーの香の湯気ひろがりぬ

谷林　立身

一本の煙草くゆらせ佛前に曽孫生まれしを語り伝へる

何時帰る出かける度に問ひし亡夫その束縛の今は恋しも

前田　幸子

好奇心強きは祖母より継ぎしもの斑入りやぶかうじ買ひ来て植ゑる

無私にしてアフガンに尽せし中村氏アフガンの銃に命うばはる

森下　逮子

団欒は彼岸に移りゆくならむ又ひとり逝くわが傍へより

身のさかりいつ過ぎにけむ着ぶくれて薄日に曳けるわが影まろし

山崎　智絵

山崎歌話会詠草

夕闇を引き寄せながら藁を焼く赤き炎を過ぎる人影

藤袴花に舞ひくる秋の蝶いきつもどりつ昼光のなか

池田　春美

小流れのせせらぎ澄みて音高しけふ立冬の川に沿ふみち

根っからの昼あんどんです老いづきてますます磨きがかかってゐます

岡本　光代

紅々と色づきたるもみぢ山ことしも人の賑はひを見る

コスモスの色とりどりに咲ききたり狭庭の風情亡母からの便り

城内　悦子

亡き母の詠みし短歌の行間に懐しき名の刻まれてあり

紅葉狩り観光客の多くして狭き通りに溢るるごとし

武野寿々代

砥峰の霧深みたる山間の自然の景色目に焼きつける

はいはいと口軽るけれど足重く老いの苦しさ重きをひきづる

森本千代子

寒の空透くごと白き昼の月形をなさぬ雲の間に

結局はひとりなんだとおもひ知るバンドエイドを指に巻きつつ

森本萬千子

お知らせ

この度一宮在住の岡本光代さんが第一歌集「風となる鳥」に続き、第二歌集「風の口笛」を上梓されました。日頃、山崎歌話会、新樹会にも出席されています。

ひとこと

短歌は、ひらめきとかインスピレーションとか直感を大事にして想像力にあるといっても過言ではありません。直感的に気づいたことを思い描いた内容を日々、メモ帳に記しておいて、他の素材、題材とタイミングよくドッキングさせれば作歌に有効に活用できると思います。見る物聞くこと行動することに注視し、さらに作歌したものをくり返し読み直して正していく。一人でも多くの人に短歌作りを楽しんでもらい、共に広めていけたらと思っています。

城内　悦子

俳句

山崎俳句協会

安富町へ秋の吟行

十一月十一日

青嶺句会　若松　幸子

明け方の雨も上がり絶好の吟行日和となり、案山子の里関集落、千年家、加茂神社へと出かけました。私にとっては生まれ育った懐かしい故郷です。顔見知りにも会うことが出来ました。案内をしながら案山子の出迎えてくれる関集落へ、紅葉もすっかり見頃で心が洗われました。千年家へ向かう途中、近所の方が優しく声をかけてくださり柿を頂きました。次に加茂神社へ足をすすめ、日本の安泰をお祈りしました。人も景色も昔のまんまの富栖はいい所でした。町の料亭で秋仕立てのお食事を頂きながら句作に入りました。

鹿ヶ壺山荘のもみじの前で

・昼暗き加茂の社や冬ざくら　光子
・出迎える案山子の一家せきの里　チエノ
・零餘子飯言わずもがなの塩加減　ゆき
・穏やかな里やかかしに迎へられ　みほこ
・村長のかがしが迎え里吟行　良子
・町おこし案山子の里は照紅葉　幸子
・親しさは字の案山子も里人も　緑山

当日欠席の方の詠草

・寒村に入り日束の間山粧う　駆雲
・母の味まねて茎漬いとうまし　とみこ

青嶺句会詠草

・冬紅葉今日の命を照り返す　秋久　光子
・山茶花や代々に古りたる蔵庇　門積　緑山
・貯木場積む木において山眠る　浅田　蕪耕
・焼芋屋今日は売れおり露路ふかく　杉山美保子
・梅雨晴間熱き声援こだまする　鳥羽チエノ
・囀りに元気をもらふ朝かな　田中　良子
・明け初むる庭の囀りひとしきり　若松　幸子
・畑から手挽ぎでもらう名残茄子　中尾　富子
・冬うらら皇后さまの誕生日　三浦　ゆき
・揺らぎつつ紫の風藤袴　原田　駆雲
・平成の思い出胸に去年今年　重田　陽子
・秋涼し茶柱立つや朝の膳　谷口　昭子
・木漏れ日を受けて滴り光おり　鳥羽チエノ
・もぎたての無花果持ちて朝の客　西田　宣子
・陽の恵み得て切干の甘さかな　三浦　ゆき
・禍に耐えて命のかぎりすがれ虫　原田　駆雲
・山眠る古き御堂は荒れしまま　浅田　蕪耕
・芭蕉忌や亡兄の遺愛の古歳時記　杉山美保子

山脈句会詠草

・寝つ醒めつ炉辺に彼の世の友と合ひ　谷口　昭子
・長き夜や厨にさがす残り酒　鳥羽チエノ
・禁猟区渓に種吐く通草かな　西田　宣子
・鶏がふくらんで眠る日の短　三浦　ゆき
・忘れえぬいろいろありて年の暮れ　重田　陽子
・母痴呆娘が連れライブ冬ぬくし　谷口　昭子
・照りはえる夕陽に染まる吊し柿　鳥羽チエノ
・木の葉舞うつとめ終えしを美しく　西田　宣子
・八人で見守る挙式夏の雲　三浦　ゆき
・峡や今刈田となりて煙立つ　重田　陽子
・限りある命大切玉子酒　谷口　昭子
・人照らし街も照らして冬の月　三浦　ゆき

・新米に農夫の誇り玉光る
・夕野分ブルーシートの屋根に揺る
高井　麗子
・観覧車ゆっくり動く春の雲
・向日葵の花一列に過疎の村
岡田　福代
・若さとは歩くスピード駅の春
・水仙のラッパ奏でる音色はラ
澤田　豊子
・一人居の心通わす秋桜
・一合のびんの中まで秋の風
古谷　晃子
・夏山の墨を照らして月渡る
・空高く弦楽の音舞い上がり
清水　省三

五色俳句会詠草
「五色の春秋」

・新学期動き出したる花時計
・千年の命根方に藤の棚
秋久　光子
・煮え滾る釜にたかんな庭の朝
・蔵出しの曝書昭和の皮表紙
重田　陽子
・悠久の遺跡抱きし大夏野
・裏径の足裏にやさし夏落葉
角野　慶子

・わが庭の月が磨きし古灯篭
・人生のおおかた歩き蝸牛
三浦　雪
・余生にも嬉しき日あり燕の子
・里山の風の奥より秋の声
冨井　幸子
・文教の町の息吹や春隣
・飛花落花疎水の風にあやつられ
角野桂治郎
・幾山河光る新緑令和開く
・あと少し気儘に生かむ露の玉
福元　敦子

しそう笹ゆり・山崎みやこ句会詠草

・静寂の里に時雨の風吹きぬ
・同級生二人目叙勲神楽月
小田　朝子
・受け皿も溢れんばかり新酒酌む
・釣糸の秋空に舞ふ光かな
是兼　妙子
・ふる里の風の味染む吊し柿
・秋遍路抜きつ抜かれつ馴染む顔
坂井　惠子
・輝きて紅葉暮れゆく過疎の里
・一輪のための晩年菊花展
坂井　久栄
・酒蔵の匂いここまで紅葉山
・散りつくし炭焼く生活始まりぬ
重田　陽子

・教科書を開(あか)げていびき掘炬燵
・炊き上がる甘き香りや栗御飯
谷口　昭子
・いにしえの暮らしを今に村かかし
・ふる里のほのぼの黄なる初しぐれ
速水美知代
・山峡のツルベ落しや茜雲
・谷音の中の鳥声冬木立
矢野登次郎

やまさき文化大学句会詠草

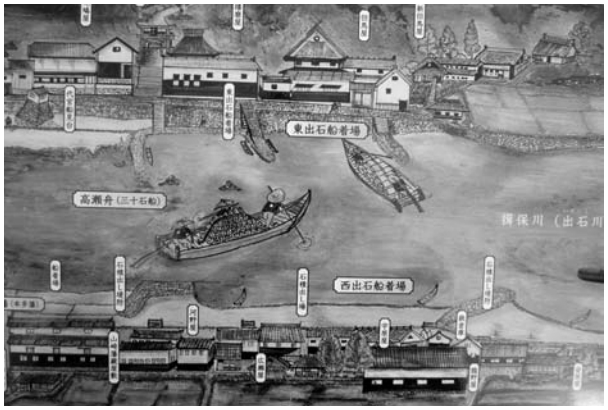
・師とあおぐ友の見舞に吾亦紅
・足湯して国なまり聞く冬の旅
金山　英子
・終活の話題ふくみて松手入
・古暦わが家の歴史負いしまま
坂井　惠子
・ひんやりと夜具の感触花の雨
・それぞれの目に夢がある卒業子
坂井　久栄
・紅梅に白梅競い空青し
・父の歳越えて眺める盆の月
清水　省三
・手土産と妣へ供えし栗おこわ
・月忌日墓前へ手折る庭の菊
高井　智代
・どくだみの白さ増しゆく軒の下
・蟹鍋や枕並べて旅の宿
萩原　惠子

・美(うま)しき花つつまし咲(さ)きて都草
・生きて方四度の祝宴竹の春
平形　照美
・余生なほ夢大きかり去年今年
・冬夕焼散歩の犬に従ひぬ
宗平　圭司
・千枚田鴉の遊ぶ捨案山子
・花の数増ゆるも淋し冬桜
里見　和樽

揖保川高瀬舟舟着場周辺整備の思い出

山崎郷土研究会
伊藤一郎

昭和五十八年の秋に、当時本会の会長をされていた今は亡き堀口春夫氏から十二波周辺の江戸時代の遺跡「高瀬舟舟着場の石組み」と山崎本多藩の藩主別邸である「浜御殿跡」の保存について、相談を受けました。当会としてなんとか残したいという熱い思いに心を打たれ、郷土研究会役員一同の署名入りの陳情書を持って、私も堀口会長とともに町行政や建設省（今の国土交通省）姫路工事事務所、兵庫県龍野土木事務所を訪れて保存に向けた事業推進をして欲しいと要請したこと憶えています。



出石舟着場風景画（下村哲三氏作）

ある時、姫路工事事務所長から地域の意見を吸い上げる制度ができたことを聞き、河川法改正（平成九年）により「河川環境の整備と保全」が加味されたことを教えられました。山崎町時代、災害対策に合わせ、揖保川を利用した地域活性化を目指す河川整備計画を策定するために「揖保川活用検討委員会」が組織され、当保存会の代表もその中に参加して揖保川舟運の遺跡「舟着場の石組み」と「浜御殿跡」を残せる計画を立案するよう依頼することが出来ました。

平成十六年六月に山崎町揖保川利活用基本構想が発表され、同二十一年には「かわまちづくり基本計画」が策定されて、その二年後から国土交通省は河川改修工事に着工しました。

そして、平成二十九年八月に「今宿・中広瀬地区かわまちづくり、せせらぎ公園披露式」となり、長い年月をかけて完成しました。

昨年の洪水で崩れはしたものの、再生に向けた工事が進んでいます。川岸に立つ時、往時の堀口会長の面影が偲ばれます。

改めて「新潮会」のご紹介

新潮会
岸本義明

新潮会第三十五代会長を務めることになりました。昭和二十七年六月に発足したこの会も、六十九年という長い歴史を刻んできておりますので、活動内容についてはよくご存知の方もいらっしゃると思いますが、現在は会員二十五名。四組に別れて、毎月第二火曜日にそれぞれの組が順番に当番になり、いろんな分野の講師を招いて勉強会を続けています。ただし、一月は新年会、二月は総会、四月は観桜会（二年に一度は一泊で）ということになっております。昨年はテレビでもご活躍の放送大学の教授に東京から来て頂き、皇室に関するお話を聞かせていただいたりもしました。毎回講義を聞かせて頂いたあと、会員の皆さんから活発な質疑がなされ、盛り上がります。

五年毎に記念誌を発行しています。それを見ていただけば、新潮会の活動と同時にこれまでの歩み・歴史を読み取っていただけるでしょう。今後も会員の皆さんと協力して活動を継続していきますが、できればもっと多くの市民の皆さんに入会していただければと願っています。できれば四十代・五十代の方にも入会してもらえれば、会の運営も今以上に活気づくのでは、と期待しているところであります。

さて、こうした私たちの活動が地域文化の発展にいかほど貢献しているかはもちろん定かではありませんが、毎月の会合で得た知識や感動をいろんな形で市民の皆さんに伝え共有して頂くことで、魅力ある「まちづくり」に貢献できればと願っています。

以上誠に簡単なご紹介で申し訳ありませんが、今後とも文化協会の一員として会員の皆様と共に歩んでいきたいと思っていますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

茶華道と私

宍粟市茶華道協会
山口澄代

若松に千両万年青生け込みて

令和二年のお正月をめでたく迎え早くも七日、意味ふかい七種粥の習わしを大切に守り続けて八十余年、雪の日も、寒い北風もいとわずナズナ芹摘みが楽しくて、自然に恵まれた里に住む幸せに感謝の日々です。

迎春に羽根を休めし孫おくり
日ざし和き野辺に草つむ

一首

私が茶華の道に縁あったのは国民学校六年生の時でした。大阪から疎開された茶華の心得のあるお爺様に祖母の仲間が孫を集めて指導を頼んでくれたのです。男女合わせて十人程でした。食べ物も着る物もなく学校では墨でぬり隠した教科書で勉強の時代でした。

野山で採った花材で花を生け、お茶は手づくりの豆乳に抹茶の粉をわずか混ぜ合わせ、茶筅は使い廻しで泡をたてるお稽古でした。それでも、とても美味しかった事を覚えています。私にとってなんと素晴らしい出会いだったでしょう。父が戦地に行ったまま帰って来ない家庭で長女の私は、手伝いを当てにされる日常の中で、お茶お花の時間が何より嬉しい時でした。

高校時代には谷川善勝先々代の観月先生（茶名）にご指導を受け茶道を学びました。

ますます私の身心を捉え、保育所に勤め幼児に接する時も花の心得、茶道の心得が一筋の人生観となり生活にゆたかさを養ってくれました。

結婚生活に入った頃、茶道裏千家、華道嵯峨御流の秦宗琴先生にご縁を戴きました。もの静かで温かい指導を受け、子育て中も離れる事が出来ず時々は子供同伴でお稽古を続ける事ができました。これこそ私の生涯の道標となり、現在を迎えています。

思いやりのある優しい社中達が身近にいてくれて老いゆく身を助けてくれます。様々な出会いとご縁が繋がって地域の幼小中学校にも心よく受け入れて戴き、学校茶華道の講師として二十余年続いている事に感謝しながら新年を歩みだしたところです。

即位の祝賀能

山崎謡曲同好会
三谷恭三

二〇一九年五月、先の天皇のご退位により皇位継承が行われ、平成から令和への改元がありました。能楽の世界には、こうした改元の機会に上演される演目があります。それは「大典（たいてん）」という観世流の能です。能の演目の多くは室町時代に観阿弥や世阿弥等によって大成されていますが、この能は大正天皇の即位を祝して創作された祝言物の曲で、ドイツ文学者の藤代禎輔が詞章を担当し、二十四世観世宗家の観世元滋（左近）が節付けをしたようです。初演は一九一五（大正四）年だったそうです。

「大典」とはもともと重要な儀式の意で、天皇即位にかかる皇室儀礼「即位の礼」を「御大典」とも称します。能「大典」は、この御大典にちなんだ内容になっています。それは、新天皇である大正天皇の即位の奉告祭が京都の平安神宮で行われた際に、神殿に詣でて奉告を行った勅使（ワキ）の前に、天女（ツレ）が現れて天女の舞を舞います。やがて天津神（あまつかみ）（シテ）が姿を現し明治天皇の徳をたたえて神舞を舞い、新しい御代を寿ぐという内容です。天津神は颯爽と舞い大正の御代を寿ぐと、吉兆のシンボルである鳳凰や丹頂鶴などが現れるというめでたさに満ちた曲となっています。

令和元年五月の「改元」に始まり、十月の「即位の礼」と続いた二〇一九年ですが、その間七月には横浜能楽堂で九世片山九郎右衛門のシテでこの演目が上演されました。このときは原作の〝平安神宮〟が現在に合わせて〝伊勢神宮〟に改められたようです。いずれにしてもこれまでの平成の時代に感謝すると共に、令和の御世（みよ）がいっそう平和で豊かな時代になることを祈りたいと思います。

宍粟市少年少女合唱団

六年　上所　菜々実

わたしは歌が大好きで三年生から合唱団に入りました。私の住む町には合唱団がないので、安富町から山崎町に通っています。最初は音程が取れず、つられてちがうパートを歌ってしまうことが多かったけれど一生懸命練習して上手に歌えるようになりました。みんなで声を合わせて歌うのがとても楽しく毎週の練習が楽しみです。わたしは合唱団に入って、いろんな学校の歌が好きな仲間に出会えました。今まで知らなかった多くの多くの歌にも出会いました。今は定期演奏会にむけて、歌とミュージカルの練習をしています。みんなで力をあわせて、たくさんの人に感動してもらえるようにがんばりたいです。

育成会　上所　千晴

宍粟市少年少女合唱団が発足してから七年が経過しようとしています。

娘が合唱団に入団したのは小学校三年生の時でした。少子化が進み、当時娘の小学校では一学年三人で女子は一人。その中で、心を開放させられるような場所、居場所があればと思い探していました。入団してみるとシニアや高学年のお姉さん達が小さな小学生の世話をしてくれて、年齢や地域をこえ交友関係があり、歌を通して娘の世界は広がったようです。

合唱団で習った曲を娘に教えてもらい、家族で歌う団らんの一時は、私にとって暖かなかけがえのない時間となりました。また、保護者会の一員として多くの出演ステージに関わり、皆で協力して一つのものを作り上げるすばらしさを、娘と共に学ばせていただいています。

時代の流れを越え、美しい自然に囲まれたここ宍粟の森に少年少女の歌声が響き続きますように祈念します。

最上山　もみじ祭での合唱

「芳野懐古」藤井竹外

山崎詩舞道連盟
篠の丸吟詠会
小田博己

詩吟に親しんで五十年の歳月が流れました。その中で今日は「芳野懐古」を選んで私の感ずる所を述べさせて頂きたいと思います。

古陵松柏天飆吼
山寺春尋春寂寥
眉雪老僧時帚輟
落花深処南朝説

【通釈】吉野の後醍醐天皇の御陵の前に来ると、松や柏の大木が空に吹きあげるつむじ風にうなり声をたてている。この山寺の如意輪寺のあたりに春景色を尋ねると、桜の花も大方散って人影もなく、ひっそりとしてものさびしい。眉の白い老僧がしばらく掃除をやめて、落花の散り敷いたところで南朝の昔話をして下さったのには、ひとしお感慨深いものがあったと記されているのみで「南朝を説く」について詳しく説明された文献は見当たりませんでした。

そこで知り合いの方にたずねたところ、藤井竹外の「芳野懐古」にある「南朝」は、後醍醐天皇が奈良県吉野に開いた朝廷のことですと次のように説明してくださいました。

鎌倉時代末期、鎌倉幕府の執権、北条高時の持っていた政権を何とか朝廷に取り返そうとして後醍醐帝は、楠木正成や新田義貞らを味方に引き入れ、反鎌倉ののろしを挙げる。初めは後醍醐側は弱小で帝も幕府側に捕らわれて、隠岐へ流されるが、次第に帝に味方する武将が増え、特に正成の千早城での奮戦でついに北条高時は敗れ、鎌倉幕府は壊滅します。頼朝の幕府開設以来一四一年ぶりに天皇が政権をとるのですが、天皇親政の政治体制はいろいろ不都合があり武士、民衆も不満で、その武士階層を代表して、足利尊氏が反後醍醐帝の旗を挙げ、これに呼応して多くの武士が尊氏につきます。しかし尊氏は、正成や、北畠顕房らに敗れ九州に逃げます。しかしその九州で尊氏は勢力を盛り返し十数万の大軍で京をめざして攻め上ります。正成らは神戸湊川でこれを迎え討しますが敗れ、正成は自害、後醍醐は京より吉野へ逃れ、ここで南朝を開きます。一方、尊氏は京で北朝の朝廷をつくるのですが〝南朝を説く〟というたった五文字の中になんと未語り尽くせない深い歴史が重なっていることに驚嘆するのみです。

民踊グループと共に

さつき民踊グループ
安川　英美子

台風十九号による風水害で被害を受けられた方、またお亡くなりになられました方々にご冥福をお祈りいたします。

時代も令和となり人生百年とも言われ私も定年退職して早十二年が経過しました。五十路の時何かお稽古をしてみたいと思い友人と縁あってさつき民踊グループに入れていただきました。振り返ると長いですが、保存資料を見るとなつかしく思います。長い間続けて来られたのも、踊りを通して会員皆が仲良く楽しく、そして何よりすばらしい指導をしていただく先生（坂東寿賀幸師匠）に出会えて教えてもらっているお陰であると思っています。

また私の不注意により二度の怪我をしてグループの皆様にご迷惑をおかけしましたが、グループ代表の方より人生百年先は長いのでリハビリと思って続けて頑張った方が毎日楽しい人生が送れると言ってくださり、自分の出来る踊りを自信を持って楽しんでいける様頑張っています。

そして年二回春の芸能祭、秋のふれあい文化祭そして各施設訪問等、若い時に比べ動作は遅くなって来ましたが、見ていただいた方より「楽しかったよ」と言う声を聞いた時、達成感を味わえる喜びもあり、続けてよかったと感じています。

今後とも、さつき民踊グループに暖かいご声援をよろしくお願い申し上げます。

春の芸能祭

山崎美術協会と六十年

山崎美術協会
福岡　久藏

朝、ぼんやり連続ドラマ「スカーレット」を見ていると、陶芸家志望の男が小さな茶碗を手に持ち「この茶碗が五万円します。普通のサラリーマンの月給の二倍です。なぜ、こんなものがそんなに高価なのか分かりますか。」

「それは、この湯呑みが見る人の心を動かすからです。そして、人に元気を与えたり、励ましたりするからです。時には人の心を癒したり和ませたりもするからです。」と言われていました。

文化というか、芸術というものは本来そういうものなのでしょう。

ここ山崎町でも、昭和三十三年に、芸術や文化の啓蒙と発展を図ろうと山崎美術協会が発足し、私も誘われるままに参加しました。

当時、写真は全てモノクロでしたが、各自が暗室を持ち、現像から焼き付けまで全て自分でしていました。

伊藤親保先生など家を改装して、日本画や洋画の用具や絵具を揃え、提供拠点（伊藤画廊）にされました。

医者の友澤先生は、西宮からプロの陶芸家を呼んで、指導を受けながら作品づくりに没頭されていました。

秋の宍粟市美術展の書の審査員の深瀬裕之先生が「書は白と黒との調和です。」と言われていましたが、田内龍暘先生は六十年前にそう言って、前衛の書に挑戦されていました。それはとても斬新に見えました。

それぞれ、皆本気でしたし、みんな一生懸命でした。

それだけに、作品を展示する時は見栄えのする場所とりに殺気？だっていたように思いました。

でも、感じが違ったのは蒔絵師の武野金霞先生です。先生は少しも急がず、残されたところへ何も言わず、黙って作品を並べられるのです。争いは起きません。こういう生き方こそ本当の文化人なのでしょう。

さて、山崎美術協会は第五十一回展を最後に、今年から宍粟美術協会と一緒に活動をすることにしました。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

（百人一首）

かるたに寄せて

山崎かるた同好会

渡邉禮子

かるたといえば羽根つきや福笑いと共に皆で楽しむ正月の風物詩で昔から親しまれてきた。しかしずいぶん前から子供が羽根つきをしている姿を見た事はない。今のように手軽に楽しめる遊びが無かった頃、かるたは正月に限らず通年楽しまれていた。明治生まれの父の時代、夜になると近所のどこかの家でかるたを取り合っていたようだ。物の無い時代、自分で堅紙を切り、表に白紙、裏に色紙を貼り、読み札と取り札計二百枚に丁寧に書かれた筆文字は祖父が書いたと聞いているが大変な作業であった事だろう。手作りだというのにぴったりと百枚が重なるのには驚いた。今も残っているその札は表の白紙はももけ、毛羽立ち、所々すり切れて文字が読みにくくなっている。それを見れば当時の人々の娯楽であった事は容易に想像できる。

数年前〝ちはやふる〟という漫画本の影響で百人一首がブームになった。若い人達が関心を持ち、地域のかるた人口も増えたように聞く。

競技かるたの醍醐味は相手に勝つという事も当然であるが、他にも札を読み継ぐ時の〝間〟がある。前の札の下の句から次の札の上の句に読み継がれるその一秒あまりの空白の〝間〟である。読み手の呼吸を感じ次に発する音を全神経を傾け聞きとる。その瞬間、反射的に体が動く、手が動く、はじかれた札は二メートル程飛ぶ。また勢いのついた札は時には障子をも破る。聞きのがせば目の前の札を相手の手がさらってゆく。その瞬間の緊張はプレーした者でしかわからない。

毎年一月に学校でかるた大会があるらしいが、これだけに終わらせず古典に親しむきっかけになれば良いと思う。歌の背景やその時代について、考え話し合えば世界観や考え方にも幅が出てくるかもしれない。

自分が若い頃、かるたに夢中になり大会があると聞けば仙台、金沢、東京等遠方にまで出かけたがそのような熱いたぎるようなエネルギーはもうない。静かに歌を楽しみ、かるたを楽しんでいる。

七十年前の海賊の歌

山崎囲碁同好会

三宅哲朗

私の趣味は囲碁と読書です。囲碁は二人でやる勝負ごとですから結構スリルがあって面白いゲームですが、読書は一人で好きな本を楽しめばいいわけです。ただしわたしの場合は図書館の読書会の会員なので、毎月一回は指定された本を読むことになります。その時はジャンルも多岐にわたりまた新たな感動や驚きを味わうことができるので楽しみです。

実は、数カ月前の読書会で私にとって思いがけない〝驚き〟がありましたのでそのことをお話しします。

その月の指定本はイギリスの作家スティーブンソンの「宝島」でした。古典童話の名作とされる一冊です。その内容は、主人公のジム少年が大人たちと一緒に海賊と闘いながら宝島へ財宝をさがしに行くという海洋冒険物語です。大人も楽しめるスリル十分の本でした。

前以て私が自宅で読み始めてすぐに、年老いた海賊が舟歌を歌う場面が出てきます。

〜亡者の箱には一五人――えん
やこらさ　おまけにラム酒が
一瓶よ！

この一節を読んだとたん、なぜか私の口から同じような歌が節つきでスラスラと出てきたのです。

〜十と五人で棺桶の島によ――
流れ着いたはラム酒が一瓶よ
――よほほのほい

なんと〝驚いた〟のはこの歌を突然歌いだした私自身でした。エッどうして？こんな歌おぼえていたの…？それから次々と思い出していたら子供のときから大の仲良しだったH君にたどりついたのです。彼は大層な本好きでした。小学校五〜六年のときには恐らくこの「宝島」も読んでいたのでしょう。私にも奨めてくれて、そのときにこの歌も教えてくれたのだと思います。それで現在の年齢から逆算したらもう七十年も昔のことになるのです。こんな昔の出来事が私の脳味噌の片隅にひっそりと眠っていたというのも不思議なことですが、さらにこの歌には後日談がありました。それはこの本の読書会本番の日に、私はこの海賊の歌を自分で手拍子を打ちながら大きな声で歌ってやったのです。出席の皆さんはあっけにとられていましたが、私一人は愉快でした。

和太鼓に出会えたこと

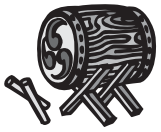
宍粟和太鼓アーツ倶楽部
中務花音

私が和太鼓と出会ったのは、小学校入学前に観に行った宍粟和太鼓フェスティバルです。友達が和太鼓を演奏している姿を見て、私もこんな風に和太鼓を叩いてみたいと思い、小学校入学と同時に和太鼓教室に入門しました。初めて和太鼓のバチを持った時は「和太鼓のバチってこんなに太くて重いんだ」と思いました。週に一回の練習は楽しくて練習日が待ち遠しかったです。私が初めて和太鼓フェスティバルに出演した時の子でも、教室のメンバーは五人という少ない人数でした。とても緊張しましたが練習通りの演奏が出来、満足でした。

そして私は小学四年生で「倭童子（わらし）」に入りました。倭童子は中学三年生までの和太鼓チームです。私は倭童子に入る事を目標に練習してきました。けれど中学生の先輩達との練習ではいつも緊張していました。私のミスで練習を止めてはいけない、足を引っ張ってはいけないと思い毎日のように家で練習をしました。週一回の練習はプレッシャーと緊張で楽しかった練習が楽しいものではなくなり、待ち遠しかった練習日がだんだんと苦痛に感じてきました。初めて練習に行きたくないなと思う様になりました。倭童子での和太鼓フェスティバルは緊張のせいか何度もお腹が痛くなり、舞台での演奏はあまり覚えていません。それでも心の隅に先輩達みたいに上手になりたいという思いがあり、和太鼓を辞めたいとまでは思いませんでした。練習を重ねるにつれ少しずつ自信も付き、「もっと上手に」という思いが強くなりました。

今、私は「弾紅（だんく）」と「倭童子」の二つのチームに所属していて、沢山のイベントに出演させていただいています。演奏を聴いてくださった方々から「とても良かった」とか「元気が出た」「感動した」と言ってもらえる事があります。その時はとてもうれしくて和太鼓を続けてきて本当に良かったと思います。

和太鼓に出会えた事は私の大切な宝物です。



昭和会より

昭和会
安井克典

昭和会は昭和三十二年五月に当時の二十代と三十代の若者達によって創立されました。「光陰矢の如し」と申しますが、令和二年の今日まで六十年の年輪を積み重ねております。

当時の会員諸兄の上に思いを馳せますと、会員の職業は、人が誕生してから、終焉を迎える迄の、例えば産婦人科の医師から、寺院の住職、勿論、衣食住、教育、医療、と全職業を網羅しておりました。

「個人で出来ない事を集団の力で出来るようにする」「故郷を住み良い環境にする」をスローガンにして、色々な行事、有名人を迎えての講演会、オーケストラを招聘し、音楽会や、郡内の各学校を巡回しての音楽教育の普及、他団体の文化への協力などを行いました。社会の為に貢献を立派に尽くした、という自慢は会員の中から叙位叙勲に輝いた会員が八名に及んでいる事です。会員に対しては、全家族を対象に、夏は網干の新舞子へ海水浴、冬は戸倉へスキー、春は桜、秋は紅葉、松茸狩り、と貸切りバスを仕立てて、個人では出来ないことに挑戦いたしました。

顧みますと、昭和という時代は大変に変化の激しい時代でありました。昭和二十年代の後半から、モータリゼーションの嵐が吹き荒れます。それは今まで、下駄箱か自転車置場で済んでいたのが、駐車場が不可欠となり、消費革命は商品流通の根源を揺るがし、算盤、電子計算機、コンピュータ、インターネット、ＡＩ、と推測不可能の時代に入りました。敗戦後日本が二度と立ち上がれない様にすることが戦勝国の目的でありました。先ず家族制度が崩壊し、占領当初から始まった、３Ｓ政策（スクリーン、スポーツ、セックス）による効果は七十年を経て、結実しております。逆に今や時代は変わり強い日本が求められています。これから、どうなっていくのでしょう。

これからの諸問題を解決してゆく鍵は、人と人との強力な信頼と結びつき、そして協力にあると考えます。

家族を思いやる。友人を思いやる。故郷を思いやる。力を合わせて、国を憂い国難に立ち向かいましょう。

平成から令和へ

平成会
菅原　淳

平成会は平成元年に結成され、一昨年三十周年を迎えました。私は平成会設立当初から会員として参加させていただきました。当時二十代後半で一番の年少組でありましたが、今年還暦を迎えることとなり、過ぎ去った平成会の歴史に感慨深いものを感じています。

当初の発起人は数名で、その後私達の父親世代に当たる新潮会の二世の方を中心に現在二十八名の会員で構成されていますが、年齢層もこの三十年で七十代から四十代へと拡大し、職業も様々な業種の方々が会員として活動されています。

平成会の理念は「地域社会の文化的諸問題を調査研究し、文化的発展に寄与することと、会員相互の親睦を図り、相互の資質の向上を目指すこと」であり、毎月講師を招いての自己研鑽を中心に活動するとともに、五年に一度の記念事業には地域の皆様に音楽等を通じて文化に触れて頂ける機会として記念コンサートを開催してきました。

三十周年記念事業時には海上自衛隊東京音楽隊による記念コンサートと、隊員による市内の小中学生への演奏指導を行って頂きました。また、昨年は会員の親睦を図るために記念旅行を催し、二泊三日で東京・伊豆方面への旅行を行いましたが、会員の三分の二が参加して頂き、非常に楽しいひと時を過ごすことができました。

私達は三十年間を共に歩んできましたが、バブルの絶頂時から失われた二十年という言い方が定着した「平成」から「令和」へと改元した今も、会が発足した当時の理念通り、文化的な発展に寄与するとともに、会員の親睦を図り、相互の資質の向上を図り、山崎町の文化がより良く発展していくよう考えながら、地域文化の発展に寄与できればと考えています。

最後になりましたが、日頃より山崎文化協会様をはじめ各種団体の皆様にはご指導ご支援を賜り、誠にありがとうございます。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

山崎邦楽の会 初夏の演奏会顛末記

山崎邦楽の会
光陽会
野村恵子

日ごろ私たち五社中にとって練習の成果を発表する場はなかなか多くなく、また出演しても演奏時間が限られるため、大曲を披露したくとも難しい状況がありました。本会は発足十年の節目を迎えるということもあり、念願の演奏会を開催する運びとなりました。社中代表で打合せを重ね、プログラム編成はもちろんポスター図案や様々な発注、依頼等事務作業は多くの方々にご協力いただきながら稽古と同時進行。半年あったはずの準備期間は瞬く間に過ぎ、迎えた当日。音響と録画撮影はプロに依頼しましたが、舞台や観客席など設営の殆どは社中で前夜と当日午前中で行い、リハーサルもそこそこに開演時刻となりました。来賓としてご案内した福元市長や山崎文化協会事務局長もお越しくださり、ご挨拶を頂戴しました。来場者は百数十名を数え、準備した椅子が足りない有様に嬉しくも身の引き締まる思いでした。

尺八、長唄、箏曲の演目は二十一曲と多いうえ、何かと不手際な段取りで想定以上に長時間となりましたが、最後まで多くの方々にご鑑賞いただきありがたく存じます。私個人的には当日の運営段取りに気を取られ、肝心の演奏が、得意と自負していた曲も不本意な出来であったのが非常に情けない限りで、常日頃の精進不足、至らなさに反省しきりです。

何はともあれ、念願であった山崎邦楽の会による演奏会が開催できました。

昨年一月、突然鬼籍に入られた前会長の石野晴童（和雄）さん、空の上からご覧になっておられたかしら。

「あんたらエエことしたったな。わしも一緒にしたかったな」

優しい笑顔が見えるようです。

踊り・宝・継ぐ

山崎日本舞踊の会
郁踊会
金川千香子

午後のおけいこ場に〝おはようございます。〟との明るい声が響く。にこにこ顔の皆さんが集ってきます。踊りの大好きな仲間達です。心は生涯青春の若々しい藤間豊巳千師匠にお世話になって、早四年が過ぎました。

〝花は色〟〝踊りは心〟〝人は道〟と常々話されます。心を込めて踊りたいと、皆さんと共に一生懸命励んでいます。某自治会からは毎年、お声を掛けていただきます。また老人ホームへも出掛けます。一生懸命に見て下さる皆様の特別な笑顔が私達の大きな支えです。豊巳千師匠は折にふれ、山崎の地から日本舞踊が消えないようにと言われます。この思いに応えるべく、皆さんと共に真剣に練習しています。師匠の心からの思いを、しっかりと受け継いでまいります。

令和元年九月、私は国立文楽劇場の大舞台に立たせていただきました。演目は〝鶯宿梅〟です。今から思えば〝何と大きな事をやってのけたなぁー〟師匠がカラスで井口さんが梅、私が鶯でした。大変でしたが、貴重な楽しい思い出です。家族をはじめ、心よく応援して下さった仲間の皆様に深く感謝です。ありがとうございました。特に豊巳千師匠には、台詞入りの踊りのため、大変ご苦労をお掛けしてしまいました。重ねてお礼申し上げます。これからも痛い足をさすりながら皆様と共に、まっしぐらに精進してまいります。ありがとうございました。

鶯宿梅の一場面

教え子からのうれしい便り

山崎民謡連合会
石田陽子

教え子のある女の子は小学一年生からおばあちゃんに連れられ三味線、民謡と頑張っていました。民謡も数々のコンクールに出場し優秀な成績も収めました。

九年間頑張ってきましたが高校進学の為、活動を中止し勉学に励み社会へ。四，五年後でしたか活動を再開、イベントや訪問など積極的に参加し、メキメキと上達、頼りになる存在となってくれましたが、残念ながら仕事の関係上継続することが難しくなり、退会となりました。

しばらく連絡は途絶えましたが、ある日、彼女から手紙が届きました。それには結婚の報告と「仕事の中で民謡や三味線の音色を聞く事があり、とてもなつかしく、先生に教えてもらった事が自分にとって宝物であり、誇りです」と書いてありました。とても懐かしいです。うれしいですね。

伝統を伝える事が出来たかな？と思います。子から孫へと民謡の良さを継承して行けたら、少しでも携わってくれて将来また何かの役に立つ事が出来れば甲斐があったかと。

今までに十一名の子供たちが習っていましたが、それぞれ進学や就職でやめて行き現在三名の子供たちが頑張っています。うれしい便りもありましたが、心の中に残っている事がうれしいです。将来何かの縁で再会する事を楽しみに、今年も歳に負けず元気で頑張らなければと思います。

平成から令和へ

宍粟山崎手作り甲冑の会
小林茂樹

宍粟山崎手作り甲冑の会を立ち上げてから早五年の月日が過ぎました。立ち上げ当時は「武者行列で町おこし」をテーマに地域の方々を始め市外の方達にも宍粟の良さを知って頂きたく、一日も早く武者行列を開催したいと、素人集団が悪戦苦闘した日々が懐かしく思い出されます。

元号も令和に改まり、元年十一月十七日に第三回山崎本多藩まつりを地域の方を始め各関係の方、会員の皆様のご協力のもと開催することが出来ました。

回を重ねる毎に反省点も数多く、これで満足と言う事は有りませんが、その都度皆んなで議論し、初心に返り新たな気持ちで続けていかなければと思っております。

もう一つは、この本多まつりを次世代に継承し、十回二十回とまつりが続いていく事だと思います。

今、世の中は甲冑ブームと申しますか？、全国各地で、武者行列等が開催されております。

私達、甲冑の会の趣旨は地元の歴史を学び理解し次世代に継承していく事です。甲冑作りや武者行列は、それを広めていく為のツールにすぎません。毎年いろんな所のイベント等で、試着体験をするのですが、興味の有る子供さんや大人の人が、沢山来られます。ただ甲冑を着て楽しむだけでなく、「昔の人はこれをどんな時にどのように使っていたか」等、子供さん達が興味をもつ様な話もし、楽しんで歴史の勉強に繋げていければと思っています。

甲冑の会も全員がボランティアで活動しております。大金を投じて、立派なイベントは出来ませんが、こつこつ、一歩づつ前へ進んで行き、何年か先で「皆んな頑張って来て良かったなぁー」と喜び合える日々を願っております。

今後共、ご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

歌の力

山崎町民合唱
高寄恵美子

歌が人の心を癒すことは阪神淡路大震災や東日本大震災でも被災した多くの人が体験しています。歌詞に込められた思いに歌い手の思いを重ねメロディーに乗せて届けると、我慢していた涙があふれ安らかな落ち着きを取り戻し、やがて立ち上がり前に進む力をも生み出します。

私が山崎町民合唱に入会して十数年になりますが、出会った歌は人生の歩みと不思議に重なりました。「落葉松」を歌った時は苦労の真っ最中、落葉松に降る冷たい雨と心情がぴったりでした。「さようなら」は丁度夫が亡くなった時、いつかまたいつかまた会える日までと涙しながら歌いました。幸せな気持ちで子守歌を唱ったのは孫が生まれた時でした。人生の節目に忘れられない歌と出会い、歌に自分の気持ちを投影し乗り越えて来たように思います。

さて最近の私はといえば、指導の栗山先生の選曲される高尚な歌で心を浄化し、長井先生の素晴らしい伴奏で細胞の活性化を促し、今練習中の良寛和尚作「君や忘る道」では、実年齢を忘れ楽譜の上で恋をして若返るという厚かましい願いまで込めて歌っているのです。

山崎・加生・つたいさわ冠句会

中瀬　公三　選

静観す　検査通院医者任せ
松飾り　新しい干支藁鼠
西川　少升

静観す　揺れる紅葉に風感じ
松飾り　年の瀬飾り願い込め
飯塚　正浩

静観す　「ええよ」の返事励まされ
松飾り　願いは一つ恙無く
嶋津　千里

静観す　口だしせずに手も出さず
松飾り　家々の門に福来たる
高井　玲依

静観す　国会放送にぎやかに
松飾り　納めて願う年の末
成影　廣子

静観す　車の下に座する猫
松飾り　立派な代物店の前
西家　侑希

静観す　子等の幸福願う日々
松飾り　元気に過ごしまた一年
三木ひづる

静観す　諭すすべなく老病人
松飾り　令和の御世に引きつがれ
山口　定子

静観す　若き力の町起こし
松飾り　家族の絆生き生きと
坂本　忠彦

静観す　がっぷり四つの大相撲
松飾り　南天の赤鮮やかに
大谷　志路

静観す　つばを飲み込み深呼吸
松飾り　新春の空晴れわたる
東　多津子

静観す　病床の窓秋写る
松飾り　春光受けて幸招く
内海喜代子

静観す　事の真相解かるまで
松飾り　初詣人待つ社
実友　勉

静観す　子供や孫の幸せを
松飾り　平穏祈る年始め
為国真佐行

静観す　他国の報道おかき食む
松飾り　日本の印籠ここにあり
谷笹　まや

静観す　無沙汰が良しの老婆（はは）独り
松飾り　揃う慶び雑煮膳
中務　淑子

静観す　日朝関係どうなるの
松飾り　地元のワラで〆作る
中瀬　公三

静観す　自然の力限り無く
松飾り　キリッと心引き締まり
宇田　幸夫

川柳破丸会

長川伸介

平成から令和へと時代が移り行く中、私たちはその年々の世相や人生の機微、また何気ない日常の一コマなどを五・七・五の川柳にして、月一回の例会を楽しんでいます。

そんな例会も積もり積もって二百五十回を数えました。その礎を築いてくださった先輩方の川柳に対するすばらしい感性と飽くなき情熱に、改めて敬意を表する次第です。

作品はにししん本店や宍粟総合病院等に展示していますので、ご覧いただければ幸いです。

なお、新しい会員も随時募集しています。興味のある方はぜひご連絡ください。

連絡先
〇九〇ー一九一五ー七八八六
谷口

読めぬ字に　うなずいている　書道展
ばあさんや　なあにじいさん何だっけ
老けたねと言われてやめたダイエット
生田　大思案

我が家では　俺はとっくに　退位した
原発の　金に手を触れ感電(関電)し
一時間　待って診察　はい三分
岸本　新風

日記書く　はて朝食は　何食べた？
ばあさんは　腰は重いが　口軽い
落雷は　平気女房で　慣れている
清水　三省

風水に　こだわるわりに　運がない
おじゅっさん　月命日は　誰のため
月見酒　花見酒だと　かこつけて
髙橋　忘剣家

父の日も　父の財布で　外食し
腹まわり　食べた栄養　ひとりじめ
クーラーの　中で野球に　熱中症
谷口　遊愉

献血に　行って言われた　輸血せよ
おもてなし　隠れ受けてた　進次郎
加齢なる　一族ですと　爺と婆
谷口　柳幸

寒い日の　予報は膝が　よく当てる
勘違いを　認知ととられる　歳となる
いよよ来た　釣りだけもらって品忘れ
千本　風筅

今時は　ポイントゲットに無駄を買う
夏草も　私ものびる　この日照り
ドラレコが　証明したわ　夫婦仲
中居　絵師

飲み忘れ　したことがない　晩酌は
使い捨て　捨てていいかと　妻に聞く
「右」前の　浴衣姿も　ある花火
坂東　笑雅

雨風に　負けぬが妻に　すぐ負ける
別腹と　食べたデザート　太腹に
踏み間違い　自信と過信と　慢心と
船元　哲心

計算は　相手にまかす　消費税
やれ嬉し　ひ孫の宿題　手伝えて
約束も　先にした方　忘れてる
安井　楽庵

月末は　いつも財布が　ダイエット
その噂　根も葉もないが　枝はある
聞く耳は　持たぬが持ってる　地獄耳
長川　酔伸

追悼　安井道夫さん

山崎町文化連盟（現山崎文化協会）の機関誌『やまさき文化』の前期二〇年（一九八二～二〇〇二）の歴史は安井道夫さんを抜いて語ることが出来ません。あなたは発足時から編集委員として会誌の発刊に深く関わり、同時に作品を執筆され、その数は創刊以来一四に達します。この時期の作品は次の通りです。「鳥葬のこと」「ポール・デルボー讃」「ラダック旅行断章」「阿修羅のこと」「新蔵公路を行く」「大アンデス展を見て」「インドからの手紙」「クレデイスタンの思い出」「恨の峠を越えて」「お茶の文化あれこれ」です。これらに共通するのは、中央アジアや南米などの途上国の民とその暮らしへの温かいまなざしと、そして日本文化への豊かな造詣です。あなたのお人柄とこの作風が『やまさき文化』の基調であるヒューマニズムと人間愛の謳歌及び豊かな自然観照に大きく貢献したのでした。

また、あなたの作家としての流儀は、その真剣さと強靭な意志を以て私たちに強く迫ってくるものがありました。逝かれる四ヶ月前、『カフカ（可不可）』第七十九号の後書きに「生きることは雑用多く、病人でも勝手なことばかりするのは許されないようである。……まあ、書けただけでも喜ぶほかないのである。……どうしても読みたかった本を一冊でも、二冊で読めれば有り難いと思うほかないのである」と書いておられます。八六歳にして「一冊でも、二冊でも……」という気力とあなたの真実への真摯な憧れに、強く打たれたことでした。凄いのは一八年前の第二十一号に「内部の障害を取り払って自由闊達にものが書けるようになるのはいつのことか」と「言葉の力を実証する」ことに燃えておられたことです。

あなたが五〇歳の時、立ち上げられた同人誌『カフカ』（可不可）はフランツ・カフカ（一八八三～一九二四）に由ると聞きます。それは彼の希望と挫折や神学的アレゴリーの作風を具えた実存主義的な考え方に傾倒されたからでしょうか。しかし誌名に（可不可）と括弧書きされた意味にも深い興味をそそられます。それは個々の案件やアポリアに対する判断が「可」・「不可」のどちらかを問い、狐疑逡巡して迷っている人間存在のありように対する問いかけの意味を含むのではないかということです。

「人間（じんかん）の是非、一夢の中」「世上の栄枯は雲の往還」と良寛さんが詠んでいますが、いつか、私も泉下の客となり、樹下で共に盃を傾け、人間や社会を論じる時が来ることを楽しみにしつつ、あなたへの畏敬と感謝の気持、そして哀惜の念を込めて追悼の辞といたします。

令和二年二月十日

やまさき文化編集委員長　鎌田　裕明

第四十一回春の芸能祭ご案内

日　時　二〇二〇年五月十七日（日）午前十時から

場　所　山崎文化会館　大ホール

主　催　春の芸能祭実行委員会・
（公財）宍粟市文化振興財団

後　援　宍粟市・宍粟市教育委員会・宍粟市文化協会・
宍粟市山崎文化協会

山崎文化協会の参加団体が中心となって、会員の皆様の日頃の練習の成果を発表いたします。一宮・波賀・千種からも賛助出演していただく予定をしています。

多くの皆様のご鑑賞とご声援をいただきますようよろしくお願いいたします。

今年度の出演予定団体をご紹介します。

□邦　楽　司友会・光陽会・琴泉菖蒲会・絵夢の会・藤の会

□邦　舞　郁踊会・春陽会・むらさき会・千代の会

□民　踊　さつき民踊グループ

□詩舞道　紫洲流日本明吟会・冠翔流扇翔会

□民　謡　山崎民謡連合会

□日本舞踊　山崎日本舞踊の会

宍粟市山崎文化協会
役員及び団体名

会　長　前野　良造
副会長　三谷　恭三
　　宮脇　昭介
　　秋久　澄子
　　大谷　司郎
理　事　田中　健三　山崎郷土研究会
　　下村　悦子　山崎文学会
　　鎌田　裕明　新潮会
　　城内　悦子　山崎歌人協会
　　三宅　哲朗　山崎囲碁同好会
　　小倉　庸永　宍粟茶華道協会
　　三谷　恭三　山崎町謡曲同好会
　　栗山　忠雄　山崎町郷土芸能保存会
　　下村　孝吉　昭和会
　　上所　千春　宍粟市少年少女合唱団
　　鳥羽チエノ　山崎俳句協会
　　西川　慶子　さつき民踊グループ
　　福岡　久藏　山崎美術協会
　　辛川　健二　山崎邦楽の会
　　中谷　多江　山崎日本舞踊の会
　　川原　勝典　山崎詩舞道連盟
　　中野　剛志　山崎町民合唱
　　藤永　幸正　宍粟和太鼓テーツ倶楽部
　　菅原　　淳　平成会
　　石田　陽子　山崎民謡連合会
　　清水　省三　川柳破丸会
　　宇田　幸夫　山崎いさわ冠句会
　　渡辺　禮子　山崎かるた同好会
　　小林由佳子　宍粟山崎手作り甲冑の会
監　事　前野　洋一
　　菅原　　淳
事務局長　伊藤　次郎
事務局次長　谷林　哲哉
会　計　小西　美穂

（敬称略・順不同）

「やまさき文化」編集委員

編集長　鎌田　裕明
委　員　下村　悦子　秋久　澄子
　　大谷　司郎　城内　悦子
　　鳥羽チエノ　長川　伸介
　　野谷るり子　小西　美穂

編集後記

本誌は三九号、一九八二（昭和五七）年の創刊以来三九年を経ました。宍粟市山崎文化協会は当初一九団体で構成されていましたが、現在は二四団体です。

創刊号の巻頭で当時の山崎町文化連盟会長庄静夫氏は本誌への期待を次のように記しています。「山崎町における諸文芸、例えば詩歌、俳句、小説、随筆、論説等の創作発表の広場として活用され、育成され、やまさき文化の花が美しく開花する日の来ることを心から念願する」

今日の『やまさき文化』の歴史はまさにこの期待に応えたものであり、各団体の会員の活動そのものが山崎の文化の一部であり、同時に全部であると思われます。

前野良造文化協会長は、地域文化継承が円滑に、発展的に行われる為には地域の事業が的確に承継されることが必須であると、文化の基盤を確認しています。この上に文化の継承が行われ、そのための要件は保存と利用であり、ここにデジタル技術の一層の活用が求められる。これは「関係人口」の増加に繋がると記されています。新鮮な視角から未来を展望した貴重な提言です。

安井道夫氏の巻頭作品は、奇しくも氏が創刊号に発表された「鳥葬のことなど」を補完発展させ本誌のために書き下ろしていただきました。大きな歴史の激流の中でのゴロク族の習俗のかたちを精彩に描かれ、それは私たちをアムネマチンの自然に誘ってくれます。

特別寄稿の有田尚徳氏は社会の安定的持続発展の基礎である法律の専門家。緻密で高度な思考で難問を調整し解決する生活の中で、「文化人になりたい」と文化への憧憬を私たちに語りかけられています。

二二団体から寄せられた活動報告や会員の詩歌・随想等に接すると、揖保川の川音や国見山にかぶさる入道雲が浮かんでき、大歳神社の藤の匂いが重なってきます。また、そこには作者が体験してきた純真無垢な少年期、セピア色の青春期そして草木黄落の老年期の風景が映されて深い味わいがあります。

表紙は宍粟の美術界を牽引されているベテランの一人、藤原義弘さん、題字は本誌で数多くの秀作を発表され編集長としても活躍された荒木俊介さんです。記して感謝申し上げます。

編集長　**鎌田裕明**

やまさき文化　第39号

令和２（2020）年３月20日発行

編　集　『やまさき文化』編集委員会
発　行　宍粟市山崎文化協会
事務局　宍粟市教育委員会事務局
　　社会教育文化財課内
印　刷　㈱支林館印刷所

コーエカメラ

Specialty Camera Shop

■本　店/〒671-2576
宍粟市山崎町鹿沢26-3
TEL(0790)62-2089　FAX(0790)62-7429
E-mail info@ko-e-1972.com

■咲ランド店/〒671-2545
宍粟市山崎町中井10 咲ランドSC1F
TEL・FAX(0790)63-0533
E-mail saki@ko-e-1972.com

不動産のことならお気軽にご相談下さい

土地・建物・売買・仲介・マンション・アパート賃貸

株式会社ファースト商事 エイブル

親切丁寧をモットーに社員一同皆様のご来店をお待ちしております。

株式会社ファースト商事
エイブルネットワーク山崎店
宍粟市山崎町今宿２１番４
TEL ０７９０－６２－０００１
FAX ０７９０－６２－４７８７

株式会社ファースト商事 福崎店
エイブルネットワーク福崎店
神崎郡福崎町西田原１８２１番４
TEL ０７９０－２２－１２３５
FAX ０７９０－２２－１２３６

ふじむら貸衣裳

人生の節目を飾る大切な一着を貴方に

結婚式はもちろん成人式・卒業式・七五三
また留袖や訪問着・喪服のご衣裳など
豊富な品揃えでお客様をお待ちしています。

兵庫県宍粟市山崎町山崎１８１　Tel:0790-62-0052　http://www.fujimura-kashiishou.com

贈り物に…「しそう杉ボールペン&シャープペン」

三菱鉛筆「故郷（ふるさと）の木持ち」シリーズは、地球温暖化と地域材振興策に「少しでも役に立つ商品」をコンセプトに作られた筆記具です。全国の都道府県産のスギ、ヒノキ、ヒバ、マツ等に高度な木材の加工技術を施したもので、適度な重さが高級感を醸し出しています。兵庫県では「しそう杉」が選ばれています。「しそう杉」のほのかな香りをお楽しみ下さい。

トクサヤ文具

山崎町山崎 180-1 TEL62-0067

¥1,800＋税

さらにレーザー彫刻（オプション）であなただけの１本に…

参加賞、記念品に…しーたんステーショナリー各種あります!

ほっと、ひといき 伊沢の里

○お祝いの会食　○法要後の会食
その他各種宴会承ります
リラクゼーションルーム　好評稼働中

〒671-2517　宍粟市山崎町生谷214番地１　TEL0790（63）1380

森の妖精/ネーチャ

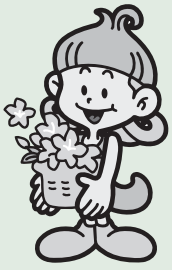
地域で最も信用・信頼される
金融機関をめざして

●豊かな街づくりをお手伝いする●

西兵庫信用金庫

https://www.shinkin.co.jp/nisisin/

TEL 0790－62－2020



森の妖精/サッキー

貴邸の電力を自給自足!

発電→売電 太陽光発電 Panasonic × 発電+給湯 エネファーム ENEOS

スマート&エコな
「光熱費=ゼロ」リフォーム

＝ お車と住まいの快適、なんなりと ＝

ホンジョウ

(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)

本社 宍粟市山崎町中井 96

石油・タイヤ・洗車・オイル
バッテリー・車両整備・保険
☎0790-62-4321

電気・ガス・水道工事・家電全般
住宅リフォーム・太陽光発電
☎0790-63-1234

NAGATA

長田産業株式会社

本　　社　兵庫県宍粟市山崎町千本屋215
〒671-2544　ＴＥＬ(0790)62-1177(代)
ＦＡＸ(0790)62-1219番
ホームページ　http://www.nagatasangyo.co.jp/

つくるでつなぐ

UEBAYASHI

上林建設株式会社

http://www.uebayasi.co.jp

■ 医療施設　■ 介護施設　■ 工場・事務所　■ 店舗　■ 住宅

イメージキャラクター
けんちくん

本　　社 〒671-2535 兵庫県宍粟市山崎町宇原 345
TEL 0790-62-2828　FAX 0790-62-7186

姫路支社 〒671-2222 兵庫県姫路市青山 3-10-2
TEL 079-266-2801　FAX 079-267-1633

ギフト・記念品に名入れ刻印で
オリジナル筆記具はいかがですか

名入れ料金１本３５０円

イトーオフィスサービス(株)

山崎町中広瀬１１７－１２　宍粟市役所南向い
TEL 0790-62-0126